
happy birthday ~私だけの騎士様~

月影れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

happy birthday 私だけの騎士様

【Zコード】

Z2044E

【作者名】

月影れん

【あらすじ】

「ナン君誕生日記念の小説です。カツプリングは超甘々コ×蘭です。蘭ちゃんの一人称小説になっています。あと、蘭ちゃんがショタコンっぽくなつてしまつてます…。私のことを呼ぶ新一の声…でも、小さい手が私の腕をはなしてくれなくて…。振り向くとそこには…愛しの小さな騎士様がいて…。

(前書き)

「ナン君&新一君ーー誕生日おめでとうーー！
『蘭（蘭）』小説ですか…（^ー^・）

↙↙「ナン誕生田記念小説
～私だけの騎士様～」↙

私は愛してしまった。

幼い彼の事を…

これは罪？イケナイことなの？決して食してはならない禁断の果実？

でもどうしようもなくあなたを愛してゐるの…。

時の流れのよう

水の流れのよう

この気持ちもいつ留められない。

あれ？誰かの気配がある……。

え…？誰…？

私の腕を掴むのは…。

この先にいるのは新一？私の名前を呼ぶ声…。
必死に私に手を振つている。

でも…駄目…。

小さいけど逞しい手が離してくれないの……

まるで、

おまえを行かせてたまるか！
つて感じに……。

あなたは誰なの？姿を見せて……。
もしかして、私の愛する彼方？

私を呼ぶ声量を強める新一……。

私の手を掴む力も強まっていく……。
ん……、この手の主の顔を被つている靄は晴れないまま……。
でも……このあたたかい体温は……この安らぎをくれるやわしい体温
は……

彼しかいない……

「……」
「……」

私は愛しい人の名前を呼ぶ。

このなにもない空間にその声は飲み込まれていきやうだった……
反応がなく私は不安になる。

「……」
「……」

小さな小さな声……。

でも、私の耳には……いや、心にはすくべ雄大に響き、染みこんでい
つた。

私の待ち望んでいた声だ……彼だ……。

彼が言葉を発した後、徐々に靄が晴れていく。

見える……嗚呼、愛しい 愛しい 愛おしい…彼の姿が…。

彼は騎士の格好をしていた。

とてもとても可愛らしくて、格好良い…私だけの騎士様…。その優しい瞳で見られただけで心がとろけてしまいそう…。

ドクドク

私の心臓が踊りだす。

あなたの不思議なスカイブルーの瞳に吸い込まれそう…。返事をしたきり口を閉じて暫く私を見つめていた彼がやつと口を開いた。

「蘭姉ちゃん……むいりに新一兄ちゃんがいるよ…? 行かないの?」

不思議そうな声。

その声に私はハッとなる。そして私はそつと顔をしかめた。

「コナン君……新一はとても遠いんだよ…。

いつも近くにいて私を支えてくれていたのはコナン君だった…。

彼がこんなに大きな存在になっていたなんて…。

新一は私のことなんかどうでもいいんだ…。

いつのまにか、私の頬には涙がつたつていた。

「コナン君は私のそれを見て慌てふためく。

それがとても可愛らしくて、堪らなく、おもわす、微笑みが溢れた。

「…?」

「コナン君は、キヨトンとして首を傾げる。そんな彼の動作一つ

つが愛おしい。

私がどうにかなっちゃいそ」。

「蘭姉ちゃん…?」

ボーイソプラノの心地よい声。。

眼鏡の中で大きく見開かれた空の声。

よし…言っちゃえ…！

「もう、いいんだ…私…」

「…え？」

彼の空がゆらりと揺れたのが分かつた。

そんな彼の空…瞳を見て思つた。

今、私は大変なことをしようとしている…？

でも躊躇いなどない…

もうあなたの事を知らなかつた頃には戻れないから…

「新一なんて…いらない。彼方が好きなの…。愛してるのよ…」

／

「…／／／！？」

言つた瞬間、涙が溢れた。そして耐えきれず、声を上げて泣き出す。幼く優しい手が私の頬にそつと触れた。

嗚呼温もり…

「…僕も好きだよ…蘭姉ちゃんのこと…」

え…！？嘘…

信じられない。

私の永遠の片想いだと想つてた…。

「…本…当…に！？」

「うん…／／／」

幸せ…。彼は照れながら、私に愛の呪文をかける…。

あ…涙が出てきた…

嬉しくて…

幸せな時も涙つて出るものなのね…

「う…嬉しい…」

私の今の正直な気持ち。

「コナン君…！」

私は田の前の小さな騎士を思いつきり抱きしめた。

「…あつ…／／／」

フフ、桃色のほっぺが可愛い。

なんか…こうしてると落ち着くし…安心する…。

苛めちゃいたい…

食べちゃいたい…

奪っちゃいたい…

私のものにしちゃいたい…

自然に笑みが溢れて、抱きしめる力を強めた。

彼の温もりが心地いい…

心臓の鼓動も…

呼吸のリズムも…

優しい声調も…

…彼のすべてが心地いい。

もう何もいらないの…あなた以外は…。

すべてを捨てるわけじゃない…。

こんな感情を抱くのはこんな二人だけの時間だけ…セカイ

「蘭！蘭！」

新一…まだ私を呼んでいたんだ…。

「お願い…もう止めて…！」

新一のこと今でも好きだよ…。でも、遠すぎたの…。コナン君はいつも傍にいてくれた…。私を支えてくれた…。だから、私はコナン君のこと選んだの…。」

「蘭！蘭！」

「お願い…もう止めて！
…耳障りなの…！…！」

あ…。

今、私…酷い事言つた…。
ごめん…新一…。

これは、新一に対する裏切り…？許されぬ罪…？
分から…。

けれど、だけど確かに真実は一つ…。
私は今日の前にいる10歳年下の少年…江戸川コナン君に恋をして
いるといふこと…。

新一が近づいてくる…。

いや…止めて…来ないでつ…！…

「…蘭姉ちゃん…」

！？

小さい温かい手に腕をつかまれたのを感じた。

「コナン君…！」

振り向くと、そこには…愛しい小さな騎士と…寧に手入れをされ
た美しい白馬がいた。

「乗つて…！」

私は、「コナン君に手をひかれ、その馬に乗り込んだ。
「いけえ…！」

二人の声が重なる。

走りだす。

風が気持ちいい。

目の前に青々とした草原が広がる。

小鳥のさえずり、川のせせらぎ…

そして、あなたの背中の温かさ…

私を縛り上げるすべてから解放された…

二人だけの時間…

「…コナン君…」

甘えた声…。そんな声が出せるのは、コナン君の前だけ…。
「なあに…？」

キュン…優しいボーイソプラノ…。

多分、彼の優しいその声も私だけ…。

「私たちどこに向かっているの？」

「新一兄ちゃんが追つて来ない場所まで…」

これは愛の逃避行…？

二人だけの居場所を探しだす旅…

パカパカ

二人だけのリズム…。

どこまでも走つていけそうな気がしてきた。

小さい筈のコナン君の背中がとても大きくみえた…。

* * * * *

「うーん…」
眩しい…。

なんだろ？

太陽の光…？

「…あれ？」「は…」

私の部屋…。

やつぱり夢だつたのか…。彼の温もりも…

彼の愛の呪文も…

みんな夢だつた…。

少し切ない…。

私は、少し余韻に浸つてから、お氣に入りの服に着替えはじめた。

私の机の上…。

ふせられたあの日の写真…。トロピカルランドで新一と撮つた写真…。

これ以上見てくるのが辛くて昨夜…寝る前に倒しておいた写真…。

「アシ

なんとなくそれをおこしてみた。

幸せそうな新一と私…。

目頭が熱くなる…。

今日は5月4日…

「新一…誕生日おめでとう…」

…。

そ、う、だ、
電、話、
。

「おかげになつた電話は……」

ピ
ッ

切ないよ…。やつぱあなたは遅ゆがだよ…。

私は、涙をこらえながら元通りに写真をふせた。

その瞬間、涙が溢れた。

こんな想いを「見るからにならぬ」と思つて、夢の中で二十六、君とおもむろに結婚していたかつた……。

やほり和の心を満たしてくれるのには
ひとつたりとも間違ひが

「蘭姉ちゃん！起きてる？僕お腹すいたよ」

⋮
/ / / ! ?

愛しの騎士様の声…。

突然のことではうらたえた。

新一のことで泣いてたなんて思われちゃう。そんなのイヤ。
? そんな気持ちになるのは...なぜ?

あ……」ちに来る……。

モニ附せなし

「蘭姉ちや」

彼の声が途中で止まつた。心配そうな顔で、上目遣いで私を見上げていた。

「どうしたの……？ 何かあつた？」

夢でも見た優しい心地いい音色^{こゑ}…。

胸に響くよ…。

夢の続きが見られそうだよ…。

私をいつも元気づけてくれたのは…他でもないコナン君…
私が選んだ人…。

私の顔は途端に笑顔になつた。

「？」

「コナン君大好きっ！」

「…えつ？」

私は、夢で感じた温もりが欲しくてキュッとコナン君を抱きしめた。

「う、蘭姉ちや…／＼／＼」

クスッ可愛い…。

はあ…この温もりだ…。私が欲しかったのは…。

コナン君は恥ずかしいんだか…興奮してるんだか…
喜んでるんだか分からない顔をしていて可愛くて仕方ない…。
心地いい…。
もう少し夢の続きを見させてね…。

今田は5月4日。

コナン君の誕生日…。

奇しくも新一と同じ日にこの世に生まれた…。

お互いの心臓の鼓動…

お互いの躰の温かさ…

お互いの呼吸のリズム…

これは今ここに生きてる証…。

「騎士様…」

「…え？」

私は優しく抱きしめる力を強めた。

「生まれてきてくれて… ありがとう…」

さあ、騎士様… 」の唇に証を…。

「騎士や… いや… ロナン君… キスしていい?」

「…蘭… / / /」

あら?呼び捨て?

まあいいわ… 今日は特別に許してあげる。

二人の唇が重なる…。

幼いけど熱を帯びて柔らかい唇…。

嗚呼… 溶ろけそう…。

これは罪… ? イケナイこと… ?

お互いを求めるだしたらもう止められない…。

彼とのはじめてのキスはしょっぱく切ない塩の味で…
彼との2度目のキスは甘く甘い罪の味…。

「生まれてきてくれて… ありがとう…」
誕生日おめでとう、ロナン君…」

「これは2度目の台詞…。

そしてこれは3度目のキス…。

やつと一人の居場所を見付けたね…。

でもまだ一人で草原を走り続けよう…。
ずっと傍にいてね…。

私の騎士様…。

happy happy birthday….

fin.

(後書き)

「… も、円暈です。

なんとか間に合いました…。

急に「ナン君誕生日おめでとう」小説を書かなければ…と思ひ立つて、3日前に書き始めました。

夜のまどろみのなか… iPhoneベッドで携帯でカチカチ書きはじめました… そして、朝起きて読んでビックリ…！

「なんぞ…？」のショタコン小説はっ…？（、・・・）」

と…。この「蘭オタク…！！！」（笑）

はじめは、蘭が新一にもつと酷いことをいうシーンと蘭が新一のことを嫌いになるっぽいシーンがあつたんですが… 読者のみなさまに「新一の誕生日なのになんてことを…！」と言われそうだったので（笑）そこはカットして、無理やり写真のシーンをに入れました。なので、蘭は今でも新一のことは好きだけど、やっぱこいてくれる「ナンの方」が好き…といつこと…。

別に用影は新一のことが嫌いといつ訳ではないので…！

つてことで、新一誕生日おめでとう…！… &「ゴメン…」（汗）

急いで書いた小説なので、修正版もヒマがあつたら作るかもしれません。

カットしたシーンも思い出して書いてみよつかな。。。 （やめとけ）

「… 別にやらじこ意味では…」（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2044e/>

happy birthday ~私だけの騎士様~

2010年10月15日00時20分発行